

王夫之「擬古詩十九首」訓釈および擬作詩史上での位置

鈴木敏雄

I 緒言

『古詩評選』等の著で知られる明の遺臣王夫之（1619－1692、清に仕えず）にも、『楚辭』九章をはじめ、「古詩十九首」や阮籍「詠懷詩（八十二首）」（および江淹「效阮公詩十五首」）、江淹「雜體三十首」、張九齡「感遇十二首」（および朱熹「感興二十首」）等を模倣対象とした擬作が、数多く存在する。

「九昭」、「九礪」、「擬古詩十九首」、「擬阮步兵詠懷（二十四首）」、「擬阮步兵述懷（五十八首）」、「倣昭代諸家體（三十八首）」、「感遇（十一首）」等がそれであるが、これらは序の付されたもの、および原詩が『古詩評選』（1690年以前に成立）等で取り上げられ、評釈が付されているものもあり、王夫之の擬作意図を多角的に垣間見せている。

王夫之のこれら多くの取り組みは、擬作詩史上ではどのような意味を持つのか。その擬作を位置づける一助として、本稿では、典型的な一例であるその「擬古詩十九首」（1670年）に訓釈を施し、併せて、これには原詩に対する評（および一部にその擬作評）が存在するので、擬作と評の両面からその擬作意図を探り、王夫之「擬古詩十九首」の擬作詩史上での位置づけを試みてみたい（擬作と評とが密接に関連することは、【其十一】の訓釈を参照されたい）。

なおこの「擬古詩十九首」は、二句一聯ごとに原詩句を演繹する型を採っていて、歴代では、王夫之以前に陸機、劉鑠、李白、韋應物、晁補之、洪适、朱熹、高啓、錢宰が、以後には王闈運（1）が取り組んでいることが知られている（2）。

II 王夫之「擬古詩十九首」訓釈

以下、各擬作ごとに訓釈を施しつつ、王夫之の擬作意図を明らかにしてみたい。なおその際、王夫之による原詩に対する評を、[原詩評]として付す。それは、この評こそがその擬作意図を語り得るものとなっていることによる。

【其一】擬「行行重行行」

王夫之はこの其一の[原詩評]で、原詩である「十九首」は、「詩教」の根本理念である「以て群すべし・以つて怨むべし」（『論語』陽貨篇）を体したものと、言う。したがって愛別離苦を詠む【其一】も、遠く離れている伴侶を気遣い、棄て置かれても怨まないという理念に基づいて擬作されていると思われる。またその理念は、他でもないこの第一首に付されたものであるから、総序的な意味あいも帯び、【其十九】までの各篇に適用できるものと思われる。

臨岐送遠道　岐に臨みて遠道に送れば
春艸生道傍　春艸道傍に生ふ

春艸生有時	春艸は生ふるに時有り
遠行去無方	遠行は去るに方無し
逝水無西歸	逝く水は西のかた帰る無く
游子怨流光	游子は流光を怨む
高臺多夕風	高台には夕風多く
平原足晨霜	平原には晨霜足る
去者日益永	去る者は日益ます永く
留者情益警	留まる者は情益ます警む
元雲迷四郊	元雲は四郊を迷はし
方望不得逞	方望するも逞しくするを得ず
思君褰羅幃	君を思ひて羅幃を褰（かか）ぐるも
滅燭無餘影	燭を滅すれば餘影無し
棄置良獨難	棄て置くは良に独り難ければ
沒生誓幽乘	生を没して幽かに乗るを誓はん

○遠道 王夫之「胡安人挽詩」にも「夙昔蘭閨英、金弢送遠道」と見える等、王夫之の愛用語。○去者…「群れして覚せず」「怨みて怒らず」の理念に支えられた詠であろう。○方望 本来は四方の群神を望み祭る意（『公羊傳』に見える）。○沒生 王夫之みずからの人生を言った「活埋」と関連のある語か。たとい死んでもの意とも取り得るが、未詳。王夫之に於ける「生」は、「生無益於人、……老自安其命、……刀兵劫改、……生死夢中、……」（「六十初度答徐蔚子啓」）等と見え、あてに出来ないもの（3）。○乘 「秉心堅樸、不欺然諾」（「文學廬原氏墓誌銘」）等と見えるように、取り守る意。

[原詩評]「十九首」該情一切、羣・怨俱宜、詩教良然、不以言著。入興易韻、不法之法。俱以浮雲而蔽、哀哉、白日去矣。[韋應物擬古評]亦異古裁、全以從容得其丰韻。[周砥擬古評]不以氣焰取古、以精心雅度得之、遂幾誤人津濟。

【其二】擬青青河畔草

[原詩評]では、原詩の前半六句は「時」を詠んで魂を揺さぶり、後半四句は「事」を詠んで人を虜にするものであるが、一篇を通して一貫した情にもとづく「事」を詠んでいる、と言ひ、さらに、魂を揺さぶられ、虜にされる人は多いものの、それで一貫していることを分かる者は少ない、と言う。擬作も、その「時・事」による構成を踏まえて演繹されていると思われる。

東園桃李花	東園の桃李の花
南國蛾眉女	南国の蛾眉の女
灼灼相矜悅	灼々として相矜り悦び
遙遙動心語	遙々として心を動かすの語あり
清歌不再發	清歌は再びは発せず
舞袖無雙舉	舞袖は双つながらは挙がる無し
昔爲弦上思	昔は弦上の思ひを為すも

今爲夢中聚　　今は夢中の聚りを為す
 芳菲非我春　　芳菲は我が春に非ず
 爲歡復何許　　歡びを為すは復た何許ならんや

○清歌… 原詩を演繹して擬作しているのであれば、評に言うように、前六句が春という「時」、
 「清歌」以下の後四句が「事」であろう。 ○芳菲… 原詩に同じく、ともに舞う人も無く、
 自分には春が無い「事」をいう。

[原詩評]前六語驚魂動魄、後四語居要扼人、前言時、後述事、通首共繪一情事。當之者衆、
 知之者尠。

【其三】擬青青陵上栢

[原詩評]では、原詩の七句目の「車を驅る」以下は「勉むるを勸む」語であり、それが分
 かれれば詩の構造も分かる、と言う。したがってこの擬作も、七句目以下はその「勸勉」（『管
 子』に頻見する語）の理念に基づいて演繹されているものと思われる。

灼灼三春風　　灼々たり三春の風
 縈縈楊柳色　　縈々たり楊柳の色
 年少去我徂　　年少我を去りて徂き
 芳菲不再得　　芳菲は再びは得ず
 遲我心所欽　　我が心の欽む所を遅ち
 良書寄懷憶　　良書もて懷憶を寄す
 迢遞千里間　　迢遞たり千里の間
 神皋有仙宅　　神皋に仙宅有り
 朱鳳遺清音　　朱鳳は清音を遺し
 青天回羽翼　　青天は羽翼を回へず
 玉軫動鳴琴　　玉軫は鳴琴を動かし
 素月輝相即　　素月は輝きて相即く
 髣髴垂丹梯　　髣髴として丹梯を垂れ
 雲籤降消息　　雲籤は消息を降す
 願言欣相從　　願はくは言に欣びて相從ひ
 含情無終極　　情を含みて終には極まる無からんことを

○良書 王夫之の詩では、ここと【其十二】「擬東城高且長」詩のみに用例が見られる。 ○
 仙宅… 原詩の、束の間の人生を歎く者が車を驅って繰り出す大都會が、この擬作では、游
 仙詩ふうに、仙界で演繹されている。その大都會で「宴を極めて心意を娛しましむ」ことを
 原詩の「勸勉」の理念と捉えれば、擬作でも「仙宅……に欣びて相從はん」と詠んで、それ
 を演繹していると考えられる。 ○丹梯 仙道を訪う路。 ○雲籤 道書。

[原詩評]「驅車」以下、俱勸勉之詞、知此方知結構。

【其四】擬今日良宴會

[原詩評]では、原詩の最も意味深長な箇処は、心を同じくする者同士が、その思いは口に

出さないと詠む七、八句目である、と言う。擬作での当該部分は、五から八句目になろう。

殷勤重殷勤	殷勤として重ねて殷勤
置酒遙相期	置酒して遥かに相期す
華燭搖虚慵	華燭は虚しく慵きを揺らし
流光動哀絲	流光は哀絲を動かす
中觴促密坐	觴に中たりては坐を密にするを促すも
欲言還自疑	言はんと欲して還た自らを疑ふ
懷情不忍戡	情を懷くは戡むるに忍びず
勸勉當及茲	勉むるを勸むるは當に茲に及ぶべし
爲歡託榮觀	歡びを爲すは榮觀に託し
結愛在新知	愛を結ぶは新知に在り
飛蓬非久要	飛蓬は久しくは要むるに非ず
胡爲守枯枝	胡為れぞ枯枝を守る
詞終起相謝	詞終はりて起ちて相謝せば
微生命有涯	微生命に涯有り

○虚慵 「虚懈」に同じであれば、むなしく懈（おこた）る。 ○勸勉 この語は、其三評にも見られ、榮達もしくは一時の快樂を積極的に求めることの意に近い。『管子』に見られるような努力勸励の概念とは、些かの差異がある。 ○榮觀 光榮なる觀賞。漢の禰衡「鸚鵡賦」序に「願先生爲之賦、使四坐咸共榮觀、不亦可乎」とある。 ○枯枝 王夫之「古意」詩に「女蘿榮枯枝、纏綿待新榮」とある。 ○微生 王夫之「長歌行」に「搏桑無落景、瑤水無逝波。千歲有問津、微生遂經過。……」とあり、「聞鄭天眞先生收復寶邵別家兄下山而西將以臘杪往赴愴然而作」詩に「微生一日一儉生、爲惜鴻毛死亦輕。從此岐行還強飯、盡收雲水答清平」とある。

[原詩評]「齊心同所願、含意俱未伸」、一章深意、於此彷彿。

【其五】擬西北有高樓

[原詩評]で、原詩は「來端」が分からないと言うのは、「杞梁の妻」の故事が何の前触れもなく引用されているかに見えることによると思われるが、それも自然の流れを作っていると言う。続けて、状況の描写ではなく、心情を読み、と言うのは、その「自然の趨赴」を捉えることの重要性を説くものと思われる。

客從淇水來	客淇水より來たり
導我遊朝歌	我を導きて朝歌に遊ぶ
廣陌聚高居	広陌には高居聚まり
冠蓋影綺羅	冠蓋綺羅を影（ひるが）へす
良夕奏哀絃	良夕哀絃を奏で
繁聲驚素波	繁声素波を驚かす
師延亡千載	師延亡きこと千載
遺怨何其多	怨みを遺すこと何ぞ其れ多き

黄鵠感其音	黄鵠は其の音に感じ
羣飛以阿儼	群飛して以つて阿儼たり（「阿儼」は、たおやか、柔弱）
高樓離思女	高楼離思の女
長夜輦青蛾	長夜青蛾を輦む
聞者無厭情	聞く者は情に厭く無く
歌者益以和	歌ふ者は益ます以つて和す
清琴有希音	清琴には希れなる音有り
吾心將如何	吾が心將た如何せんや

○師延 殷の紂王の時の樂師。武王が紂王を伐った時、濮水に身を投じて死んだ。原詩の「杞梁の妻」を、この師延で演繹する。早くは『楚辭』に、王夫之では「九昭」に見える。
 [原詩評]來端不可知、自然趨赴。以目視者淺、以心視者長。[陸機擬古評]曲折不浮、鼓如巨帆因風、自然千里。[李白擬古評]十全古詩、一無類迹。「明月看欲墮」二句、從「高樓」「玉堂」生出、雖轉勢趨下、而相承不更作意。少陵從中生語、便有拖帶。杜得古韻、李得古神。神・韻之分、亦李・杜之品次也。一收直。溯觀上勢、固不得不以直領之。

【其六】擬涉江采芙蓉

[原詩評]では、原詩は廣大無辺の詩境を持つ、と言う。地理的な距離感と、広漠とした人生の時間を詠むことによると思われる。擬作にもそれが演繹されている。

日南有歸客	日南に帰客有り
問訊珊瑚枝	問訊す珊瑚の枝
海水深不測	海水は深くして測らず
飄零無反時	飄零として時を反す無し（「飄零」は、落ちぶれる）
相見既無端	相見るは既に端無く
相憶無與知	相憶ふは与には知る無し
唯持憔悴心	唯だ憔悴の心を持ち
畢命以爲期	命を畢へて以つて期と為す

○日南 南の涯て。【其十八】のほか、王夫之「晨發端州與同鄉人別」詩に「日南絶征鴈、桂水孤歸禽」とあり、「冬夕」詩に「天物何歸剩碧虚、霜颿難挽日南車」とある。
 [原詩評]廣大無垠鄂。

【其七】擬明月皎夜光

[原詩評]では、原詩の作者はその時その時の出来事を正直に詠んだままで、しかも情が深いので、後世の者は作者を棄てた友とは誰かのモデル探し等をさせられるが、それはいつまでも絞り込めず、結局は徒勞に終わることが分かかっていないといけない、と言う。擬作では、原詩の「我が同門の友」を「交はり……去る者」で演繹する。

太陽斂西暉	太陽西暉を斂め
織月出雲際	織月雲際に出づ
夕風改晨色	夕風晨色を改め

羣星相連綴	群星相連なり綴（つな）がる
征鳥懷故棲	征鳥は故棲を懐ひ
遙天方遠逝	遙天方に遠く逝く
巢燕依梁宇	巢燕は梁宇に依り
流螢漾池砌	流螢は池砌に漾ふ
念我結髮遊	念ふ我結髮して遊び
納交相砥礪	交はりを納めて相砥礪するを（「砥礪（シレイ）」は、とぎ、みがく）
去者日以疎	去る者は日に以つて疎く
遺我成孤贅	我が孤贅と成るを遺る（「孤贅」は、こぶ、役立たず）
宵露不及晨	宵露は晨に及ばず
餘霜無久麗	餘霜は久しくは麗しかる無し
自非金石心	金石の心に非ざるよりは
誰能永匏繫	誰か能く永く匏のごと繫らんや

○匏繫 ひょうたんのようにならぬまでもぶら下がっている、役立たずの喩え。

[原詩評] 當知作者亦即時即事、正爾情深、徒勞後人索其影射。直必不紋。

【其八】擬冉冉孤生竹

「古詩十九首」の体が「國風」を源とすることはすでに『詩品』の指摘するところであるが、[原詩評]では、其八はとりわけ「三衛」（4）すなわち國風を繼承する、と言う。また、張九齡の「感遇」詩に対する評では、それを子供服として着て育った、と言ひ、「十九首」の系統の中に位置づけている。この擬作も、『詩經』國風の典型として演繹していると思われる。

梧桐生井幹	梧桐井幹に生ひ
桐葉落井中	桐葉井中に落つ
結褵事君子	褵（リ）を結びて君子に事へ
飛蓬附秋風	飛蓬秋風に附く
秋風有息時	秋風には息む時有るも
飛蓬委荒阡	飛蓬は荒阡に委ぬ
聞關逐君行	關を聞てて君が行くを逐ひ
中道悲棄捐	道の中ばにして棄捐せらるるを悲しむ
依君日苦短	君に依るは日短きを苦しみ
別君日苦延	君に別るは日延ぶを苦しむ
傷哉驚飆集	傷しきかな驚飆の集まり
吹此雨絶天	此の雨の天を絶つを吹く
日没羣星出	日没して群星出で
長夜未冇端	長夜未だ端有らず（「端」は、終わり）

○褵 女性が嫁入りの時に着けた布。

[原詩評] 「十九首」多承「國風」、此尤嫡續「三衛」。唐張子壽又以褵此爲自出。

【其九】擬庭中有奇樹

[原詩評]では、原詩は、作者の神業か、一筆一筆は波だっているが、収まりは穏やかである、と言う。それは、明の錢宰の擬古に対する、純粹で余計なものがない、と言う評とも通じるが、晋の陸機の擬古に対する、耳を覆いたくなるような俗物（自贊）の詠も「古人」の「古道」との「同調」を求めたのであれば患いとはしない、と言う評は、一考に値する。原詩は一筆一筆確かに自己は薦めるに十分であると詠みつつも、結句でそれを自贊とならないように抑えているが、陸機にはそれが無い。それに対し、錢宰は初めから控え目である。王夫之はそれらを理解した上で、自贊を排除し、「古道」を見せるべく穏やかに収めている。

桂樹縈晨霜	桂樹は晨霜を縈らすも
芳滋久不渝	芳り滋くして久しく渝らず
采之無所贈	之れを采るも贈る所無ければ
不忍置路隅	路隅に置くに忍びず
懷袖經歲年	袖に懷きて歳年を経れば
中心良自殊	中心良に自らを殊にす
殷勤自疇昔	殷勤疇昔よりすれば
誰爲愛斯須	誰か愛すること斯須なるを為さんや

[原詩評]每一迴筆、如有千波、而終平激。古人之力其神乎。[陸機擬古評]如此則以掩映古人有餘矣。陸自有如許風味、苦爲繁雜詔曲之詞所掩耳。人可不自珍其筆、而爲物役俗尚所奪耶。作者意不可問、擬者亦相求于優肅之中、可爲獨至之情、即可與古人同調。故人患己心不至、不患古道之長也。[錢宰擬古評]純淨無枝葉。

【其十】擬迢迢牽牛星

[原詩評]では、原詩は終始牽牛織女のみを詠み、賦（直叙）、比（比喩表現）、理・事・情、いずれも適切で、この一篇こそ「十九首」であって、ここぞという処で着色しているのは完璧である、と言う。王夫之の「擬古詩十九首」もそれを演繹しようとしているのであれば、『詩』の六義の一つである「賦・比」をも演繹すべく擬作していると言えよう。

滌滌秋宇清	滌々として秋宇清く
泫泫華露滋	泫々として華露滋し
冉冉弦月微	冉冉として弦月微かに
杳杳雙星期	杳々として双星期す
良辰既不屢	良辰は既に屢しばならず
終夕亦有涯	終夕も亦た涯有り
脈脈相視間	脈々として相視るの間
爲歡還自疑	歡びを爲すも還た自らを疑へり
未必經年中	未だ必ずしも年中を経
綢繆無轉移	綢繆として轉移する無くんばあらずと（「綢繆」は、固定する）

○滌滌… 興のように見えながら賦であり、「良辰」以下で、比に移行している。

[原詩評]終始詠牛・女耳、可賦可比、可理可事可情、此以爲「十九首」。全於若不爾處設色。

【其十一】擬迴車駕言邁

[原詩評]では、原詩は情と事とを直叙し、陶淵明も「擬古」其二「辭家夙嚴駕」詩でそのような詠み方をしていて、両篇は近接する、と言う。原詩は高々百年たらずの人生ならば「榮名をば以つて宝と為さん」と詠み、陶淵明は「直だに百年の中に在るのみなるを学ばず」と詠んで、逆ではないかと思えるところを、王夫之は百年足らずの人生では己れの誠は扱いにくいと擬作し、両者の隔たりの無いことまで演繹している。

なお、この擬作は、[原詩評]で提示した陶淵明の詩をそのまま擬作に取り込んでいて、原詩と評との密接な関連を、最も端的に証明している。

日落登崇岡	日落ちて崇き岡に登り
顧望青天高	顧み望めば青天高し
四維何茫茫	四維は何ぞ茫々たる
浮雲但蕭騷	浮雲は但だ蕭騷たり
羣動既非一	群動は既に一に非ず
吾身若秋毫	吾が身は秋毫のごとし
自非精誠徹	精誠の徹るに非ざるよりは
蠕動徒已勞	蠕動徒らに已に勞す
精魄無固存	精魄は固よりは存する無く
奄忽成焄蒿	奄忽として焄蒿と成る
及今百年内	今に及ぶ百年の内
何者終吾操	何者か終に吾れを操らんや（「操」は、とる、あやつる。「豪」韻）

○精誠 『莊子』漁父に「眞者、精誠之至也、不精不誠、不能動人」とある。王夫之の詩文集中では、ここ以外に用例を見ない。○精魄 王夫之「九昭」に、「雖形終子處、而精魄相從、則不信幻成之非實也」「精魄相遇、隨君反闕、倏爾思成、安得遂如此時之心境、而非徒幻想哉」とある。○焄蒿 「焄」は祭祀の供え物の香り、「蒿」は香気が醸し出されること。『禮記』祭義に「此れ百物の精、神の著れなり」と見え、王夫之「孤鴻賦」に「謂焄蒿之仍相吻合兮、恐達者之吾欺」とある。○吾操 『管子』に「君知臣、臣亦知君知己也、故臣莫敢不歎力俱操其誠以來」とある。

[原詩評]此直賦情事、陶令亦效此、乃相去何若。

【其十四】擬去者日以疎

[原詩評]では、原詩は、七句目の「悲風多し」の句に「多」一字が有ることで、慌ただしいようにも見え、新たなものが生じているようにも見えるが、物状あるいは物を状どるとはそういうものであることを、誰も分かっていない、と言う。王夫之はその理解を擬作の三句目の「飄風集まる」で演繹したと思われる。

所思不可見	思ふ所は見るべからず
所怨不可移	怨む所は移すべからず

忽如飄風集	忽として飄風の集まるがごとく
質質何所之	質々として何くにか之く所ぞ（「質質は、かすんではっきりしない）
平生交與好	平生の交りと好みと
長逝相追隨	長へに逝きて相追隨す
中野飛燐光	中野に燐光飛べば（「燐光」は、鬼火）
白日爲之迷	白日之れがために迷ふ
函意以永世	函意は永世を以つてするも
千載將誰知	千載將た誰か知らんや

○函意 「含意」に同じか。未詳。王夫之の他の詩では、ここ以外に用例を見ない。

[原詩評]「白楊多悲風」一「多」字、或以爲率然、或以爲生新、孰知體物固然。

【其十二】擬東城高且長

[原詩評]では、原詩はしまりがなく、一首のようには見えないが、読み浸れば収まりの良さが分かり、一首であることを疑わずに読みおおせる、と言う。町並みを詠み、その季節の推移を詠み、推移に心傷める美人と理解し合いたいと詠む長篇を、王夫之は、山を詠み、そこから下界を俯瞰し、下界の賢者と交わったことを擬作として演繹している。

南山崔以嵬	南山は崔として以つて嵬
上與浮雲連	上は浮雲と連なる
俯視何浩浩	俯して視れば何ぞ浩浩たる
飛鳥翔其間	飛鳥其の間に翔く
延眺須臾中	眺めを延ばす須臾の中
心目淒以閑	心目淒として以つて閑かなり
置身如流波	身を置くは流波のごとく
旦夕空百端	旦夕百端を空しくす
焉能役心志	焉んぞ能く心志を役し
隨物增憂煩	物に随ひて憂煩を増す
疇昔遨大梁	疇昔大梁に遊び
結交多英賢	交わりを結ぶは英賢多し
千里不相棄	千里も相棄てず
良書託歸翰	良書歸翰に託す
寶玦白玉光	宝玦白玉の光
繫以雙金環	繫ぐに双金の環を以つてす
佩之四座驚	之れを佩ぶれば四座驚き
傍徨發長歎	傍徨として長歎を發す
所歎非偶爾	歎ずる所は偶爾に非ず
白璧當自完	白璧當に自ら完くすべし

○大梁 王夫之の他の詩では、ここ意外に用例を見ない（「梁」のみの単用は例が多い）。

○歸翰 徐陵「在北齊與宗室書」に「弦望之間、遲枉歸翰」とある。王夫之「南嶽賦」に「翩

駁姿其歸翰、盤容與而整翮」とある。○長歎 王夫之の他の詩では、ここ以外に用例を見ない（「歎」のみの単用は例が多い）。

[原詩評]微覺汗漫、遂令盲人疑非一首。然浸更相收放、令盲人不疑爲一首、則愈下矣。

【其十三】擬驅車上東門

([原詩評]無し)

陽春二三月	陽春二三月
緣艸被修路	緣艸修路を被ふ
青林無鮮華	青林に鮮華無く
啼駛互晨暮	啼駛晨暮に亘る
淒彼泉下人	淒たり彼の泉下の人
不知春風度	春風の度るを知らず
驅驅無返轍	駆々として轍を返す無く
誰者爲新故	誰が者か新故と為さんや
往古既復然	往古より既に復た然れば
非我獨憂懼	我独り憂懼するに非ず
天物各推遷	天物は各おの推遷す
胡爲滋驚怖	胡為れぞ驚き怖るるを滋す
慮苦不得甘	慮り苦しむは甘んずるを得ざるも
蚤計良已誤	蚤計は良に已に誤まる
滅性以求眞	性を滅して以つて眞を求むれば
浮光棲月露	浮光は月露に棲まふ
鼎鼎百年中	鼎鼎たり百年の中（「鼎鼎」は、盛大でしまりが無い）
含情抱貞素	情を含みて貞素を抱く

○滅性 『禮記』喪服四制に「毀不滅性、不以死傷生也」とあり、もともと親の喪で哀悼が過ぎ、生命を傷める意。王夫之の他の詩では、ここ以外に用例を見ない。○浮光 王夫之「和白沙」詩に「耳目忻浮光、不自知其性」とある等、王夫之の愛用語。○月露 月光の照らす露。内容が空虚なもの喩え。王夫之の他の詩では、ここ以外に用例を見ない。○含情 王夫之の愛用語。

【其十五】擬生年不滿百

仙人王子喬でない限り、人は百歳も生きられないのだから、短い人生を憂えて終わらず、今を楽しめ、と言い放つ原詩の豪放さに対し、王夫之は[原詩評]で、原詩は風・雅・頌の「三詩」が深く行き届き、英気が現れている、その英気は生き物であり、首尾の筋・脈絡は、杓子定規では捉えられない、と言う。原詩を『詩經』の理念の完成度の極めて高い一篇と見て擬作していることになる。

古人不可期	古人は期すべからず
今人當奈何	今人は当た奈何せんや

對酒乍相忘	酒に対しては乍ち相忘れ
援琴發清歌	琴を援きては清歌を發す
適意方在茲	意に適ふは方に茲に在り
憂患徒相如	憂ひと患ひとは徒らに相如たり
憤世而忘己	世を憤りて己れを忘るるも
吾生亦有涯	吾が生にも亦た涯有り
商山采芝人	商山芝を采るの人
跡瀛心自遐	跡瀛きも心は自ら遐かなり

○憂患 古人を憂い、今人を患う。王夫之「老莊申韓論」に「督之以違心之奔走、迫之以畏死之憂患」とある。 ○相如 相同じく、相似たること。王夫之「廣遣興」詩に「古人如我我如渠、影不相如畫偶如」とあり、「前鴈字詩十九首」に「今古一相如、飄飄賦子虛」とある等。 ○商山 王夫之「擬阮步兵詠懷」詩に「商山有高歌、煜煜三英芝」とあり、「春山漫興」詩に「春情極未羨、商山摘紫英」とあり、「滿江紅」寫怨に「汗青照、文山福。紫芝采、商山祿」とある等、愛用語。

[原詩評]三詩洞達、以英氣見。英氣自是生物、首尾筋絡、正不可繩尺相尋。

【其十六】擬凜凜歲云暮

[原詩評]では、夢で夫に逢ったと詠む原詩は、華麗さを深く練っていて、「色を好むも淫らならず、怨み誹るも傷めず」であり、後に班固・張衡らのお手の物となるが、最も人の心を動かす十三、十四句目の「夢に帰って来ても暫くも居ない上に、閨房に止まることもなかった」は、「国風」ではなく、『楚辭』に基づく表現である、と言い、さらに、十九、二十句目の結句に至ってひどく野暮りたいが、古人の結びはそういうものである、と言う。王夫之が擬作中で「中路」という『楚辭』に有って『詩經』に無い語を使うのも（十五、十六句目）、[原詩評]に基づいてのことであろう。

また、韋應物の擬古評では、原詩は歳の暮れであるところを、韋應物は『文選』なら削られてしまうような天気晴朗なる春の夕べを詠んだ、と言い、さらに、春の夕べだけがそうであるからそう詠んだのである、と言う。そして王夫之みずからは、落花を題材にするために、さらに初夏で演繹している。

和月春已徂	和月春已に徂き
林鳥有餘聲	林鳥に餘声有り
落英無返顧	落英には返り顧る無く
流覽怛中情	流覽すれば中情を怛（いた）ましむ
寶刀垂鞶帶	宝刀鞶帯を垂れ
昔我何所營	昔我何の営む所ぞ
中宵不自戢	中宵自らを戢めざれば
髣髴感精靈	髣髴として精靈を感（うご）かす
邂逅良人姿	邂逅す良人の姿
執手相徂征	手を執りて相徂き征く

心好自旖旎	心好ければ自ら旖旎と
隨風飄長纓	風に随ひて長纓を飄へす
雖非思所臻	思ひの臻る所に非ずと雖も
乍觀亦不驚	乍ち觀（あ）ふも亦た驚かず
願言託白首	願はくは言に白首に託さんも
疇云中路傾	疇（さき）に云に中路にして傾く
綢繆不相釋	綢繆として相釈かず（「綢繆」は、束ねる、結ぶ）
屢顧念平生	屢しば顧みて平生を念ふ
懷抱申此夕	懷抱此の夕べに申ぶれば
感之雙涕零	之れに感じて双涕零つ

○落英 王夫之「古意」詩に「堂堂背春日、悠悠送落英。春日無返暄、落英無固情。……」とあり、「瀟湘小八景詞」其三に「風狂雨妬、便萬點落英、幾灣流水、不是避秦路」とある等、夫之の愛用語。○流覽 あちこち見やる。「薑齋詩話」に「艷詩有述歡好者、有述怨情者、三百篇亦所不廢顧。皆流覽而達其定情、非沈迷不反以身為妖冶之媒也」とある。○寶刀 これも王夫之の愛用語で、「獨漉篇」に「寶刀舊結并州豪、春風日醉新豐酒」とある等、その詩文に散見する。○精靈 王夫之「瓜圃夕涼」詩に「精靈寓天宇、昭滌隨游衍」とある。○旖旎 美しく盛んである、しなやかさを温存している。
 [原詩評]好色不淫、怨誹不傷。猶于此見之。深練華瞻、自班・張諸人本色。「既來」二語故動人、「國風」無此、當由「楚辭」。結語朴野過甚、古人之類句如此。[韋應物擬古評]平雅。寫春夕者不敢道「夕含清」三字、以「天朗氣清」爲昭明所刪。實則不然、但于春夕體之。

【其十七】擬孟冬寒氣至

[原詩評]では、この原詩は、第一首とともに高みに懸かり、その他の詩は、衆くの取り巻き（士大夫）である、と言うが、何を以つてかく言うかは、未詳。

白月流素天	白月素天に流れ
微霜滿空際	微霜空際に満つ
開軒極遠目	軒を開きて遠目を極むれば
清霄何迢遞	清霄何ぞ迢遞たる
仲秋元鳥歸	仲秋元鳥帰り（「元鳥」は、玄鳥、つばめ）
季秋陽鴈至	季秋陽鴈至る
染絲弄機杼	絲を染めては機杼を弄し
縱橫成錦字	縱横にして錦字を成す
上有永別離	上には有り永き別離
下有金石誓	下には有り金石の誓ひ
不知將寄誰	知らず將た誰にか寄せんとし
綢繆結封識	綢繆として封識を結ぶかを（「綢繆」は、束ねる、結ぶ）
經年藏寶篋	年を経て宝篋に蔵し
置之不忍視	之れを置きて視るに忍びず

○綢繆 王夫之の愛用語。「擬十九首」中に散見できるほか、「南嶽賦」に「其巖岫則詰軌綢繆、鉞挺弓彊」とあり、「擬阮步兵詠懷」詩に「山河既綢繆、宴處時從容」「結好在中塗、綢繆苦不安」とある等。大半は擬作に集中している。○封識 封緘し目印をつけたもの。

「結識」は、それによって人と知り合う。

[原詩評]此與「行行重行行」亢坐、餘首猶亞旅也。

【其十八】擬客從遠方來

[原詩評]原詩は、無数の起伏に富み彩り豊かでありながら、一息に詠みきっている、と言う。

錢宰の擬古に対する評では、錢宰のこの擬古を「言はざるの妙を得たり」と褒め、「十九首」は、詩史上でも格別独立した一篇で、擬作しにくいのが、原詩の作者の心境になり、己れの思いを古の志の上に素直に載せるようにすれば、原詩の作者も拒まない、と言う。そして、原詩の作者と心情を競おうとすると、逆に合わなくなり、擬古を廃さなければならなくなる、とも言い、王夫之自身の擬古観を明らかにする。この擬作も、そのような擬古観に基づいてなされているはずで、「婉繆なるを数ふる無きも、但だ一ら直ちに之れを写す」と言い得るものであろう。

昔我遊日南	昔我日南に遊び
中道至合浦	道の中ばにして合浦に至る
池水碧以寒	池水碧にして以つて寒く
鬣鬣莫能睹	鬣鬣として能くは睹る莫し
得此徑寸珠	此の徑寸の珠を得るは
云自鮫人所	鮫人の所よりすと云ふ
緘以金泥封	緘づるに金泥の封を以つてし
藉之龍文組	之れに龍文の組（くみひも）を藉く
中夜投君懷	中夜に君が懷に投ずれば
當知寸心苦	当に寸心の苦を知るべし

○日南 南の涯て（前出【其六】）。○合浦 海南島の向かい、広東の海沿いにある広西との省境の町、廉州府。王夫之の他の詩では、ここ以外に用例を見ない。○池水 合浦に大きな湖はないので、海のことではないか。○徑寸珠 ちっぽけでも価値のあるもの。『韓詩外傳』卷十に「若寡人之小國也、尚有徑寸之珠、照車前後十二乗者十枚、奈何以萬乘之國無寶乎」とある。王夫之の他の詩では、ここ以外に用例を見ない。○鮫人 真珠の涙をこぼすという人魚。「瀟湘大八景詞」其六に「君不見鮫人蜃客迷三島、韶華易老」とある。

[原詩評]無數婉繆、但一直寫之。[錢宰擬古評]三折得不言之妙。「十九首」曠世獨立、固難爲和。然以吟者心理、求躋己懷于古志、而以清純和婉將之、古人亦無相拒之理。李于鱗輩心理不逮、求之無端、競氣躁情、抑不相稱、固已拙矣。竟陵復以浮狹之識、因于鱗而盡廢擬古、是懲王莽而禁人之學周公、不愈悖乎。且竟陵於「子夜」「讀曲」一切淫媠市巷之語、字規句巨（5）、而獨以一丸泥封正始之音、安在其舍擬議以將性情耶。歷下・竟陵之前、自有此種雅道、齊固失之、楚尤未得、亦觀於天子之上林乎。

【其十九】擬明月何皎皎

[原詩評]では、原詩は歌詠の発端となるおおもとの情を詠んでいて、『詩』の「風・雅」の正統である、と言う。なお、王夫之はさらに、陸機の擬古に対しては独り構えると言い、劉鑠に対しては妄らならずと言い、韋應物には無心でありながら奇であるのは、神からの授かり物であるとも言う。王夫之みずからも、「風・雅」の正統に数えられるべく擬作し、歌詠の発端となるおおもとの情を詠んでいるものと思われる。

清風吹華鏡	清風華鏡を吹き（「鏡」は、ともしび）
明星啓東方	明星東方を啓く
起步中庭間	起きて中庭の間に歩めば
形影相傍徨	形と影と相傍徨す
夙昔志遠遊	夙昔遠遊するを志し
遲暮迷津梁	遲暮にして津梁に迷ふ
滅燭從假寐	燭を滅して假寐に従ふも
欲罷固難忘	罷めんと欲して固より忘れ難し
浩歎以徹旦	浩（おほ）いに歎きて以つて旦に徹り
不知淚霑裳	涙の裳を霑らすを知らず

○遲暮 次第に年をとる。王夫之の愛用語で、人生のスパンを一語で捉える。「南嶽賦」に「指蒼天而予正、何美人之遲暮」とある等、王夫之の詩文には頻見する。○津梁 橋、橋渡し、導き、衆生の濟度。王夫之「熊男公過訪」詩に「炯炯河鼓星、迢迢天漢廣。津梁誠有待、良會仍多爽」と見える。○假寐 王夫之の他の詩では、ここ以外に用例を見ない。○浩歎 王夫之「南嶽賦」に「叔夜浩歎于林岡、宏景褻回于句岫」とある。

[原詩評]大端言情、「風」「雅」正系。[陸機擬古評]平原擬古、步趨如一、然當其一致順成、便爾獨舒高調。一致則淨、淨則文、不問創守、皆成獨構也。[劉鑠擬古評]即物風華、體裁不妄。[韋應物擬古評]迎頭二十字、宛折回互、筆力萬鈞。遞下卻用「芳樹」二句興語授受、孤雲矗起、散爲平霞、無心自奇、神者授之矣。

III 尾声

以上、【其十一】の訓釈でも明らかにしたように、王夫之の「擬古詩十九首」はその「古詩評選」と密接な関係があることが分かるが、そこからさらに王夫之は、「十九首」は『詩経』国風を源とするとする『詩品』の評を踏まえ、擬作ではとりわけ【其一】【其八】【其十】【其十五】【其十六】【其十九】の訓釈で述べたように、『詩経』の風・雅・頌をはじめ、賦・比、群・怨、「好色不淫、怨誹不傷」等の理念を継ぐべく演繹していることも明らかになったかと思う。勿論そこに、清に仕えず明の遺臣たるを貫いた王夫之が、みずからの事情を詠み込もうとした陰影を見出ださないではないが、それは暫く、『詩経』の理念の演繹という営為の中に取り込まれているものと考えたい。

したがって擬作詩史上では、王夫之の「擬古詩十九首」は、『詩品』の「十九首」評に賛同し、擬「古詩十九首」詩が『詩経』（国風）を体して演繹されてこそ「十九首」に似るこ

とを、最も明確に表出した取り組みであると位置づけることが出来よう。

註

- (1) 王闓運は、1887年、船山学社の代館となり、主講となっている。
- (2) 王夫之は、とりわけ朱熹には「感遇」詩でも思いを寄せており、朱熹「擬古詩八首」との関連をも追って考える必要が出てくるものと思われる。
- (3) 唐の釋道世『法苑珠林』には、「死者謂專精念死。此没生彼、往來諸趣、命逝不停。諸根散壞、如腐敗木。命根斷絶、種族分離。無形無響、亦無相貌。除諸亂想、自致涅槃。不離死念、便獲功德。是名念死、……」と見え（卷四十六「引證部」第十念）、また、「生死に没す」という言い方も見えるが（「此人行慈不満足、迷没生死不成佛」「若不順聖旨、將没生死海」「誹謗如來、斷絶正教、永當沈没生死大河」等）、いずれも採らない。
- (4) 『詩經』二南に続く「國風」冒頭の三つの国風。いずれも衛国内の詠なので、十三国風を代表させて言う。
- (5) 『禮記』鄭注に「矩或作巨」とある。
- (6) なお、以上の考察に当たり使用した主な参考文献は、嵇文甫『王船山詩文集』（1962中華書局「中國古典文學基本叢書」）、高田淳『王船山詩文集』修羅の夢（1981平凡社「東洋文庫」393）、船山全書編輯委員會編校『船山全書』（1996嶽麓書社）の三点である。